小乗小仏要文しょうじょうしょうぶつようもん

新版 948

953

しようじょう 小乗

方等が

般若はんにゃ 無量義経 むりょうぎきょう

> 大日経等 発発等 経発 楞伽経 たいにちきょうとう

しんごんしゅう にょうどしゅう はっそうしゅう はんしゅうとう さんろんしゅう さんろんしゅう 二論宗

小仏の

報身はん

応身

おうじん

ほ けきょ うしゃくもんじゅうしほん 迹門十四品

ほんもんやくおうほん 本門薬王品已下の六品 げ ぽん

ならびに普賢 げん ねは 涅槃経等 んぎょうとう

劣応身 れつおうじん

勝応身

けごんぎょう 華厳経のるさな仏 廬

舎

那

たいにちきょうとう 毘 盧 遮 那

ならびに迹門 (日経等のびるさな・大日等 しゃくもん ねはんぎょうとう 涅槃経等の 仏 ほとけ

とごとくこれ我が所化にして、大道心を発さしめたり。ことごとくこれ我が所化にして、大道心を発さしめたり。こだいどうしん おこ の大菩薩は、無数劫より来、仏の智慧を修習せり。こだいぼさつ むしゅこう このかた ほとけ ちぇ しゅじゅう 涌出品に云わく「阿逸よ。 汝 は当に知るべし。この ゆっぽん まさ

れらはこれ我が子なり。この世界に依止せり」 げん 玄の七に云わく「六に本説法妙とは、経に言わく『こげん しち い ろく ほんせっぽうみょう きょう い しち -ろく ほんせっぽうみょう

せかい

説法す。『大道心を発さしめたり』とは、小説を簡非するせっぽう だいどうしん おこ 皆不退に住せり』。『我が化するところ』とは、正しくこれみなふたい じゅう ゎ ゖ みなふたい れらは我が化するところにして、大道心を発さしめたり。今れらは我が化するところにして、大道心を発さしめたり。今いま だいどうしん

なり。これ本時の説を指して迹 説を簡非するなり。 しゃくせつ とううんぬん

多種なれども、もし涅槃に依らば」等云々

しゃくぶつ

迹仏

増一阿含経の十に云わく「仏、摩竭国の道樹の下に在り。 華厳経に云わく「寂滅道場に始めて正覚を成ず」 ぞういちあごんきょう けごんぎょう とき せ そんとくどう じゅう じゃくめつどうじょう ほとけ ひさ まかつこく しょうがく どうじゅ

その時、世尊得道していまだ久しからず」 だいじっきょう じょうみょうきょう 大集経に云わく「如来成道してより始めて十六年なり」だいじっきょう い にょらいじょうどう 浄名経に云わく「始め仏樹に坐して、力めて魔を降す」じょうみょうきょう い はじ ぶつじゅ ざ っと ま くだ ぶつじゅ

だいにちきょう にんのうはんにゃきょう 仁王般若経に云わく「大覚世尊、 、日経に云わく「我は昔道場に坐して、にちきょう い われ むかしどうじょう ざ V だい かくせそん 先にすでに我がために 四魔を降伏す」 こうぶく

にじゅうくねん

二十九年」

無量義経に云わく「我は先に道 場菩提樹の下に端坐する むりょうぎきょう ろくねん ないししじゅうよねん われ さき どうじょうぼだいじゅ もと たんざ

こと六年にして乃至四十余年」

法華経の方便品に云わく ほけきょう ほうべんぼん 「我は始め道場に坐し、 樹を観

じまた 経 行 して、三七日の中において、かくのごとき事を きょうぎょう さんしちにち なか

思惟しき」

しゆい

籤の七に云わく「大乗の融通、せんしちい だいじょう ゆうずう 華厳に過ぐるもの無し。

きょう ゆえ 故に知んぬ、 経 の初めに云わく『菩提場において始めて正覚を成ず』。 大 小の 成 を説くこと皆近なり」 じょう ぼだいじょう みなごん しょうがく じょう

みや 宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、 世間の天・人および阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏は釈氏の じて止まざることを知ろしめして、これに告げて 言 わく せけん 『汝等よ。 のくたらさんみゃくさんぼ なんだち じゅりょうほん 寿量品に云わく「その時、 てん にん 諦らかに聴け。 あき がやじょう だい あしゅ さ とき 如来の秘密・神通の力を。一 にょらい 世尊は せそん とお ひみつ いま もろもろ 諸 しゃかむにぶつ じんずう の菩薩の三たび ぼさつ 道場に坐して、 どうじょう ちから のたま しゃくし いっさい

阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり。しかるに、

男子よ、 我は実に成仏してより已来、
カれ じつ じょうぶつ このかた 無量無辺百千万億 むりょうむへんひゃくせんまんおく

那由他劫なり』と」等云々 ゆたこう とううんぬん

有り。 文句の九〈天台〉に云わく「仏、三世において等しく三身もんぐ く てんだい い ほとけ さんぜ ひと さんじん しょきょう 諸 教の中においてこれを秘して伝えず。故に、一切きょう なか

せけん 世間の天・人・修羅は、今の 仏 は始めて道 場においてこ の三身を得と謂えり。故に、近に 執 してもって遠を 疑 う」 さんじん てん う にんしゅら おも ゆえ いま ごん ほとけ しゅう はじ どうじょう おん うたが

は小くして出家し、 しょうほう 小 法を楽える徳薄 わか じゅりょうほん 寿量品に云わく「諸 の善男子よ。如来は 諸 しゅっけ とくはく もろもろ 阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く。 あのくたらさんみゃくさんぼだい くじゅう 垢重の者を見て、この人のために、 ぜんなんし もの によらい もろもろ しゅじょう ひと の衆生の 我ね

かるに、 我は実に成仏してより已来、
われ じつ じょうぶつ このかた 久遠なることかく くおん

のごとし

〇三〈修 行に約す〉〇四に果門に約せば、近 成の 小 を聞 さん 文句の九に云わく「一〈往日に約す〉〇二〈現在に約す〉 しゅぎょう やく いち しゃくし おうにち みや かもん やく やく はじ ごんじょう しょう げんざい

りとし、 かんと楽えるものは、 ちょうおんだ い く どう 長遠大久の道を聞くことを欲楽せず。故に『小 釈氏の宮を出でて始めて菩提を得た き よくぎょう ゆえ

を楽う』と言う。これらの小心は今日に始まるにあらず。 しょうしん こんにち はじ

もし先より大を楽わば、仏 即 ち始成を説かず。始成を説く さき ねが ほとけすなわ しじょう

みなしょうぼう ねが

ことは、 皆小法を楽える者のためなるのみ」

また云わく「『諸の衆生の小法を楽える者』とは、 しゅじょう しょうぼう

ども、その余の小法を楽える者は、あるいは疑悔を生じ、 るところの機なり。華厳に云わく『大衆清浄なりといえ しょうぼう だいしゅしょうじょう

じょうや 依って智に依らず。聞き已わって憂悔を 生 じ、彼将に悪道 長夜に衰悩せん。これを愍れむが故に黙す』。偈に云わく『そ の余の久しく行ぜざるは、智慧いまだ明 了ならず。 ぎょう ゆえ うけ みようりよう しょう かれまさ あくどう

るに、声聞・二乗無し。ただ久しく行ぜざる者を指して、 に堕ちんとす。これを念うが故に説かず』。 彼の 経 を案ず しょうもん にじょう ゆえ ぎよう きょう

小 法を楽える人となすのみ。師云わく 『小 を楽えるは、

しょう しょうじょう 小 乗 の人にはあらざるなり。 ひと すなわ 乃ちこれ近説を楽える者を ごんせつ

小となすのみ』と」

文句の九に云わく「『徳薄』とは、縁・了 の二善、功用微劣 しも しょし とくはく ようち りよう にぜん くゆうみれつ くじゅう

なり。下の文に『諸子は幼稚なり』と云うなり。『垢重』と

けんじのぞ

見思いまだ除かざるなり」 とくはく くじゅう ひと じっきょう

の二因有らざるなり。『下の文に諸子は幼稚なりと云う』と 記の九に云わく「『徳薄・垢重』とは、その人いまだ実 教 にいんあ もん しょし ようち

聞くに堪えず。いわんや遠を聞くをや。『見思いまだ除かざ 言うは、下の 医 と子との譬えの文を指す。なおいまだ円を しもくすし たと おん もん

るなり』とは、しばらく譬えの中の『幼稚』の 言を消す。 なか ようち ことば

定めていまだ遠を知らず」

まだ

なだ

なが

に

玄の一に云わく「厚く善根を殖えて、この頓説を感ず」文げんいちいり 籤の一に云わく「一往は総じて別・円をもつて『厚く』せん いち い いちおう そう べつ えん ぜんこん とんせつ

となす」

また云わく「一代の教えの中に、いまだかつて遠を顕さい」といったがいまし、なかいまだかって遠を顕されていまかいまだい。また、まられ 五百問論に云わく「一経の中に本をもって主となす」文 ごひゃくもんろん いっきょう なか ほん

ず。父母の寿は知らざるべからず。始めてこの中において方 に遠の本を顕す〇ただ恐る。才一国に当たるとも、父母のまん ほん あらわ おそ さいいっこく あ なか

ろ至って大なり。もし父の寿の遠きを知らずんば、また父統 年を識らずんば、 失 うところ 小 と謂うとも 辱 むるとこ の邦に迷う。いたずらに才能と謂うとも、全く人の子にあくにまよ いた うしな ちち はずかし

文句の九に云わく「菩薩に三種有り。下方と他方と旧住ともんぎ、くいい、ぼさつ、さんしゅあ、かほう、たほう、くじゅう もんぎ ぼさつ さんしゅ カュ ほう たほう

ちげつ なり」 これ 池月のみを観ずるがごとし〇払 迹顕本せば、 げん 玄義の七に云わく「もし迹因を執して本因となさば、ばんぎ しち い しゃくいん しゅう ほんいん 迹 を知らず、また本を識らず。天月を識らずしてただ しゃく ほん ほっしゃくけんぽん てんげつ すなわ 即ち本地の ほんじ

ずるがごとく、迹を払って本を顕すは影を撥って天を指するがごとく、迹を払って本を顕すは影を撥って天を指しているいとしていまります。 臨んで漢を仰がざる。ああ聾騃、 のぞ そら あお 知らず、また本を識らず。本より迹を垂るるは月の水に現し また また本を識らず。本より迹を垂るるは月の水に現し の果これ本果なるを指すべきなり」 因 妙を知る。影を撥って天を指すがごとし。いかんぞ盆に 栖む所なるが故に。二には前後修立するが故に。三にす ところ ゆえ に ぜんごしゅりゅう ゆえ さん また云わく「もし迹果を執して本果となさば、これ迹をしゃっか しゅう ほんが また云わく「 諸 の土はことごとく迹土なり。 一には今仏 まさ もろもろ かげ はら しじょう さ てん ぜん ごしゅりゅう しやっか いかんが道を論ぜんや」 どう くじょう

は中間は払わるるが故に。もし本土ならば、今仏の栖む所、ちゅうげんにはらいます。 ゆえ ほんど こんぶつ す とこえ にあらず。今仏の栖む 所 は、 即 ち迹土なり。もし本土な こんぶつ ところ すなわ ぜん ごしゅりゅう じんせんふ どう しゃくど ところ

た本を識らず。今、迹を払って本を指せば、本時に栖む所 らば、一土は一切土にして、応に前後修 立・深浅不同なる べからず〇 いちど 迹を執して本となせば、これ迹を知らず、ま しゃく いっさいど いましゃく しゅう ほんこくどみょう ほん はら まさ ほん ほんじ ところ

の四土は、これ本国土妙なり」

蔵の因 ぞう 通の因 つう いん さんぎひゃっこう 三祇百劫の菩薩 動逾塵劫の菩薩 どうゆじんごう ぼさつ ぼさつ いまだ見思を断ぜず けんじ 見思を断ず だん

迹仏 えん 別で の別がん 無量劫の菩薩 むりょうこう ぼさつ じゅういっぽん 一品、 むみょう

の以かん 三千塵点劫の菩薩 さんぜんじんてんごう ぼさつ 四十一品、 しじゅういっぽん 無明を断ず むみょう 無明を断ず

そうざ

劣応れつおう 蔵さ 三十四心、 結を断じて成道す じょうどう

天 衣 え

れんげ

蓮華座

じゅういっぽん 十一品、 無明を断ずる仏 迹仏の果 しゃくぶつ か

勝応

通う

三十四心、見思

さんじゅうししん

けんじ

じんじゃ

ほとけ

塵沙を断ずる 仏

報身しん

別べっ

法身しん 円えん 四十二品、 無明を断ずる仏とけなみょうだん

虚空座